

ブログ「野次馬雑記」より

NO519 1968-69 全国学園闘争の記録 関西学院大学編 その1

今回のブログは、久しぶりに全国学園闘争の記録として関西学院大学闘争を取り上げる。

関西学院大学のホームページによると、歴史は古く、1889年に神戸に神学部と普通学部を持つ「関西学院」として創設され、1932年に「関西学院大学」として設立されたキリスト教系の大学である。

「かんせいがくいん」と読む。昨年の日大アメフト部問題で関西学院大学の名前もマスコミに頻繁に登場したのでご存知の方も多いと思う。



手元に「関学闘争の記録」(関西学院大学全学共闘会議出版局発行)という冊子がある。

この冊子と当時の新聞記事を中心に、何回かに分けて関西学院大学闘争の経過とその内容について掲載していきたい。

まず、この冊子に掲載された「闘争日誌」を見てみよう。

【闘争日誌】(関学闘争の記録より)

67・9・8 小泉財務部長、関学新聞と会見し「学費値上げはすでに内定している」と言明。

10・31 「学費値上げ阻止」全学共闘会議結成さる。

11・22 学院当局、抜き打ち的に臨時常務会を開き、同夜全共闘に対し現行学費(67年度当時)の5割アップと43、44年度連続学費値上げを一方向的に通告。

12・7 緊急理事会が早朝に開かれ、11・22の常務会案通り5割アップが決定さる。

12・16 各学部闘争委、スト権確立投票を行い、法学部の拠点ストを皮切りに、社、文、商の3学

部も無期限ストに突入。経は民青系執行部のためスト権確立せず、戦線脱落。

- 68・ 1・17 右翼、体育会系学生の組織動員により、商、学生大会で「バリケード撤去」決議され、続いて文、一法もバリケード解除。社は、後日に持ち越す。
- 1・22 社教授会、社・自治会に対し「自治能力なし」と決めつけ、解散命令で弾圧。
- 1・27 社・学生大会で「後期試験ボイコット、闘争の継続」を決議。
- 2・26 社・学生大会、「バリケード解除」を決議し、実質的に闘争は終焉。
- 3・23 法、社、商、文の教授会、26名にもおよぶ大量不当処分(退学11名、無期停学8名、停学7名)を発表。
- 3・28 卒業式当日、棍棒とヘルメットに身を固めた全共闘武装部隊70人、学院本部に突入。休み中の院長、学長に処分撤回を迫るが、教授達が右翼体育会系学生150を扇動し、攻撃を仕かけ、投石戦続く。学長、「生命に危険がある」とし、5時すぎ、兵庫県警に機動隊導入を要請。
- 4・9 兵庫県警、証拠物件押収のため、再び学内に乱入。中田全共闘議長ら9名の学友を、下宿先などで不当逮捕。長期勾留。
- 5・22 法、処分解除。以後、文の一部、商も処分解除。
- 6・26 全学総会開かれ、「教授会決定の処分は認めない。応援団の解散要求」決議さる。
- 9・26 3・28・闘争の第1回公判開かる。法廷内に公安刑事2名が潜入していることが判明し、学友100人はこれを実力で排除、「不当起訴弾該、官憲の不当弾圧粉碎」をシュプレヒコール。
- 10・21 国際反戦デー。法、文で1日スト。社では4日間のバリケードスト。
- 11・29 全学執行委員会、学院当局に対して「公開質問状」を出す。これは、学費値上げ、機動隊導入理由など8項目に対する当局の見解を問うたもので、6項目要求の土台となるもの。
- 12.12 全共闘準備会30人、理事会の行なわれている新阪急ホテルになだれ込み大衆会見を要求するが、古武学長「大学に団交の場はない」と突っぱねる。
- 12.19 法、文、社で6項目要求(①43・44連続学費値上げ白紙撤回 ②不当処分白紙撤回 ③機動隊導入、捜査協力自己批判 ④文学部学科制改編白紙撤回 ⑤学生会館の管理運営権を学生の手へ ⑥以上を大衆団交の場で文書でもって確約し、責任者は引責辞職せよ)の1日スト。
文で教授会会見。東山学部長、対教授会団交を開くとの確認書と、10・21反戦闘争を弾圧した自己批判書に署名、捺印。
- 12.23 文教授会、東山学部長の確認書と自己批判書を反古にしたため、文闘委1日封鎖行なう。
全共闘会議が、夜開かれ、学院本部封鎖が提起されたが、意志一致できず流れ
- 69.1.6 全共闘会議で、第5別館封鎖派(社闘、フロント、社学同、人民先鋒隊)と反対派(反帝学評、学生解放戦線)に分かれる。
- 1.7 第5別館実力封鎖。全共闘(社闘、フロント、社学同、人民先鋒隊)30人、6項目要求貫徹全学スト体制の構築めざす。この日から右翼の攻撃に備え、ゲバルト訓練始まる。

反帝学評、学生解放戦線派は「ショック戦術だ」と封鎖に批判、クラス、サークル末端からの組織化めざす。

- 1.10 学長、退去命令発す。「封鎖は大学の自治を根底から破壊する行為だ。ただちにこの不法行為をやめよ。いまからでもおそくない。すぐ退去して第5別館を正常な状態にもどすことを命じる」
全学執行委員会(反帝学評系)、学院当局に6項目要求に関する対理事会団交を要求。
- 1.11 法でスト権確立投票始まる。
- 1.17 学院本部実力封鎖。全共闘(社闘、社学同、フロント、人民先鋒隊)60人、未明に机、イスでバリケード築く。
学院当局、「第5別館、本部の建物の封鎖が続く限り、大衆団交に応じることができない」と回答。
- 1.18 法、無期限ストに突入。この頃サークル闘争委結成され、以後講演会活動やすわり込み運動を展開。
- 1.21 文闘委、教授会に大衆団交求め、昨年12月東山学部長が署名、捺印した10・21反戦闘争弾圧の自己批判書と大衆団交開催するとの確認を反古にした理由を追求するが、教授会「何も答える必要ない」と突っぱねる。
- 1.24 全学集会開かる。これは学院当局提唱による、第1回目の收拾策動であつたが、全共闘ヘルメット部隊150人が介入、大衆団交に切り変える。
しかし、院長、学長は一切の釈明をしないばかりか、その場から逃亡を図り、一般学生6,000人の怒りを買った。
その後、2,000人の学内大デモを展開。右翼学生職員なぐりかかり、20数名重軽傷。
この頃から全学1連協、体育会有志連合、キリスト者反戦連合が、活発に動き出す
- 1.25 商、スト権確立投票開始。 —
- 1.26 社闘実力部隊30人、未明に、社会学部校舎を、実力封鎖。
- 1.27 神、無期限ストライキに突入。経済学部集会開かる。
右翼学生に守られた教授、大衆団交に切り変るや逃亡。
新川執行部、これと同時に「闘争の責任負うことできない」と解散声明。
以後、経執行部不在。
- 1.28 全共闘(社闘、フロント、社学同、人民先鋒隊)200、深夜に文学部校舎にバリケード築く
- 1.29 文に引き続き、未明、経も実力封鎖。これで理を除く全学部で封鎖体制を確立し、当日から始まる予定であつた後期試験すべてが無期延期となった。
- 1.30 商学部でスト反対派の右翼学生ら執行部の解散求めるリコール運動始める。
 - 1.31 対理事会、常務会団交に向けての予備折衝ははじめるが、団交開催の条件をめぐって決裂。
- 2.4 全共闘「入試実力粉碎」の方針打出し、泊り込み強化。これに対し武田教務部長、「全共闘側の武装阻止にも素手で立向う」と言明し入試会場は体育館と中等部、高等部校舎を使用することに決定さる。

- 2.6 全共闘武装部隊 80 人、学院当局に雇われた右翼学生 200 が看守する体育館を未明に火炎ピンと投石で攻撃し、右翼学生を完全に粉碎。
院長は、5時 10 分に機動隊導入を要請。早朝から「入試粉碎、闘争勝利」のシュプレヒコールで学内を武装デモ。午後1時、機動隊 500、正門前に待機し、その場で、松田政男氏の講演を聞いていたサークル闘、全学1連協、キリスト者反戦連合の学友 300 人と対峙。午後2時機動隊、試験場防衛のため、体育館、中等部、高等部に配置さる。
学生会館前で、2,000 人の学友、機動隊導入に反発し、徹夜ですわり込む。
- 2.7 経済学部入試始まる。午前8時 20 分、棍棒とヘルメットで身を固めた全共闘 80 人、機動隊に突入。
7名が不当逮捕さる。引き続き、入試終了直後、再び機動隊と激突。
すわり込み部隊 500 人に減る。入試実現派 300 グランドでデモ。
- 2.8 商学部入試。全共闘、第5別館と法学部のバリケードを強化し、機動隊の強制解除に備える。
- 2.9 第5別館を除く全校舎バリケード、機動隊 2,500 によって強制解除さる。
早暁、兵庫県警は大阪府警の助けも借り、第5別館と法学部校舎にたてこもる学友 48 人をガス銃と放水で攻撃。法学部は、午前9時半に解除されるが、第5別館死守部隊 35 人は、徹夜でこれに応戦し、そこにかけてきたデモ隊 2,000 人と熱い蓮帯を交わす。
法、全員逮捕さる。
- 2.10 30 時間にわたって闘い抜いた、第5別館死守部隊 35 人、午前 11 時 50 分、ガス銃、ヘリコプター、消防車などの権力側の武器に屈す。
警棒で乱打され、催涙ガス液を浴び、屋上から階下へひきずりおろされたりしたため、全員が、火傷、打撲傷を負い重傷。
- 2.12 「全関西労学関学奪還総決起集会」に 3,000 人。
午後3時すぎ、正門近くの上ヶ原派出所を投石で襲撃。3人が不当逮捕さる。
- 2.14 機動隊常駐解かる。入試全学部とも終了。
- 2.15 全共闘、「機動隊導入による強権的闘争圧殺」に抗議して、法、文、商、社、経、神の学部校舎を再封鎖。サークル闘も、学館を占拠し泊り込む。
学院側、「ロックアウト」を宣告。
- 2.17 県警、被逮捕者の自宅、下宿など 22 か所を強制捜査。
- 2.18 学院本部再封鎖。
- 2.19 同窓会館を封鎖。
- 2.21 第1教授研究館、同別館、第2教授研究館の3建物をバリケード封鎖。
キリスト者反戦連合も、宗教センターとランバスチャペルの自主管理に入る。
学院側、26、27 日に「全学集会」を開催する旨を、全学生に文書で配布。
- 2.26 全学集会粉碎総決起集会に 500 人。
前日深夜、会場にあてられていた新グランドに当局が張りめぐらした柵を、全共闘武装部隊 100 人で破壊し、当日は早朝から武装デモ。
小宮院長、正午すぎに姿を現わし追求集会に切り変える。

院長は、「機動隊の暴力は、法の名によって認める。入試は、社会的責任上実施した」と強硬に言い張る。その後、場を中央講堂に移し、再び追求するが堂々めぐり。

2.27 前日に引き続き追求集会。院長、教授と右翼学生を動員して居直る。

5日に対理事会大衆団交を開催することを確約し、解散。

3.1 全共闘 50 人、京大入試粉碎闘争に出撃。

3.3 小宮院長と 26 評議員全員が辞任。辞任理由は「健康上重責に耐えることができない。」とれていたが、実質には確認書を反古にするための闘争分断工作。

全共闘 30 人、神大入試粉碎闘争へ。

3.5 全共闘 500 人、「大衆団交破棄に対する学院当局弾劾集会」を開いた後、図書館、産業研究所、正門守衛室を封鎖し、卒業、後期試験などによる一切の收拾策動粉碎を決議。

3.7 法、教授会大衆団交開かる。教授会、「去年の処分を白紙撤回し、今後一切の処分権を放棄する」という自己批判書に署名、捺印。

3.10 理学部実力封鎖。理闘委、教授会に対して「学院の入試強行に協力した」など6項目の自己批判を求める大衆団交を要求してきたが、教授会が、これを拒否したため。

これで7学部全部を封鎖し、中央講堂、体育館だけを残すことになった。

3.11 教職員組合は職員集会を開き「関西学院の非常事態に際し全教職員に訴える」との大学への要望を採択。

3.13 社、卒業試験に、全共闘 50 人「試験ボイコット」のデモ。機動隊 50 待機。(神戸YMCA) 革新評議会学生ら、大阪駅前「全関学人は紛争解決のため、立ち上がれ」と訴え、48 時間のハンストに入る。

3.14 経、卒業試験。(大阪予備校)

この頃から、革新評議会、民主化行動委員会、法学部有志連合など右翼諸団体の組織化進む。

3.17 革新評議会による「事態收拾」集会開かる。

全共闘 60 人、介入し、右翼学生 250 を追い散らす。

経教授会、全共闘を支持する松下昇講師に、4月からの契約更新をしない ことを一方的に決定。松下講師、これに対して「関学闘争で大学側が機動隊を学内に導入したことについて大学側は自己批判すべきなのに、それをせず、大学側の態度を批判してきた私をやめさせるのは教育者としても絶対許せない。私はどんなことがあってもやめない。一人でたたかう。」(3・18 朝日新聞)と語る。

大学評議会、28 日の卒業式中止を決定。

3.19 学長代行に小寺武四郎教授決定。「早急に新執行部を決めて正常化のために努力する抱負を語り、「廃校か否か」のアンケートを全学生に配布。

「学内正常化のため」の商学部集会、200 を集めて大阪プールで開かる。

3.22 学長代理代行に城崎進教授就任し新執行部出そろふ。

3.23 「学院正常化、全関学人総決起集会」開かれ、学内右翼諸団体、体育会系学生、教授、職員、父兄、OBなど 1,200 が結集。体育会系学生ら、プラカードを持って、集会を防衛。

全共闘 150 人「右翼粉碎、封鎖貫徹」をシュプレヒコールし、これと対峙。午後3時になると、右翼学生 200 が、正門バリケード解除にとりかかったため、全共闘武装部隊、これらを完全に粉碎。機動隊 200 が出動。以後、右翼学生の組織化進まず。

3.28 「卒業ボイコット、6項目要求貫徹、中政審答申粉碎全学総決起集会」開かる。

3.29 小寺学長代行、退去命令出す。

3.31 小寺学長代行、再び退去命令出す。

4.1 休校処置(ロックアウト)解かれる。

4.5 「入学式粉碎、6項目要求貫徹、中政審答申粉碎」集会開かる。

機動隊 300、正門前周辺で待機。

学院当局、「新しい大学の創造にむかって」の第2回目のアンケートを全学院生に配布。

4.12 新入生歓迎総決起集会。約 100 名参加。

4.13 松下講師講演。第5別館屋上で文闘委の状況劇。

4.15 理、学外試験中止。レポート形成に切り変わる。

他の学部もレポート形式による後期試験実施さる。

4.18 経済学部新入生オリエンテーション。大阪府警機動隊 100、大阪城周辺で警戒。

全共闘 30 人が、阻止行動。

4.26 「安保粉碎、沖縄闘争勝利」の国際反戦闘争。京都、神戸、東京で闘わる。

全共闘 100 人これに参加。

4.27 社、学外試験が、機動隊 100、と右翼学生に守られ、三田市の湊川女子短大で行わる。

全共闘 50 人、試験場に押しかけるが、阻止できず。

4.28 「首都制圧」沖縄闘争。東京、大阪など 20 万人が決起し、機動隊と激突。銀座、渋谷に「解放区」。関学全共闘からも東京派遣 20 人。

以上が闘争経過である。

今回は、「関学闘争の記録」の中から、1969年1月24日の「全学集会」までの部分を掲載する。

【「関学闘争の記録」(関西学院大学全学共闘会議出版局)】

闘う戦列のなかにもわれわれが粉碎せねばならないものがしのびこんでいることをまず知ることが闘いの出発点だ！



〈アトキ オマエハ
コトバトイウ コトバラ
ウシナッタニモカカワラズ
イマサラ ナニヲ
カタラントスルノカ……〉
言葉という言葉のコミュニケーションが
かぎりなくディスコミュニケーションに
風化するこの砂礫地方の帯の中
存在の立脚する机と椅子で
なによりもまずバリケードを演じ
対他化され 先取りされた イマジネールの僕自身の存在そのものを

スクリーンに キャンバスに 原稿に誕生する創造作業でもって
政治現実に向って語り始めた
十年前 夜鷹の参の星 死と突然輝き
さらなる夜への歩みの予言者の予言は
呪縛のように拠点への照準を現在に定めよ
砂礫の中 足音は 今の重い拒絶〈否〉 単調の連なり 峻絶なる黒い行為の渴きから
内なる情念のオアシスへ羞恥で泉を掘る存在と運動の引き裂かれた〈被害者〉
独身者の蒼ざめた清純なるヘンズリの定期日常と完全に訣別せよ
喫茶店で珈琲に砂糖二杯の恋人をゲバれ
泣くなよい子だねんねしなのかあちゃんをゲバれ
外なる近代 内なる封建 中和されたアカデミズム教師をゲバれ
彼と我の全体への〈否〉で 日常を切る
この「やさしさ」の中 峻然と今蘇生せよ
永続の学生への門を自らの手で押し開け
〈被害〉と〈加害〉が内なる青いまっさおなオアシスの中〈羞恥〉を仲人して 結婚する
国家の幻の外 おおくの自由を体現する投企者の この不安と喜びそのものは
世界との恋愛関係そのものではないか！
演ぜられたバリケードは 今 硬さ 確かさ 実感そのものの現実のバリケード それは僕だ
僕はバリケードだ
とぶな とび立つな 飛翔するな
立脚にまず立て ここにまず立て 永続に向けてまず立て その限りに
どこへでも いつでも飛び立てる
さらなる夜への自立した生の参の星は
今 ここに輝いている 言葉だ
〈'69 1・7 第5別館実力封鎖！〉

10・8 羽田を起点とした日本の状況が“新しい政治の季節の到来”を告げ知らせたのと同様、われわれもまた虚飾の“自由”と“平和”に色彩られた関学の地に“内なる羽田”を打ちたてねばならなかった。

牧歌的風土の中に埋没し、資本の餌となってきた関学の全歴史に対するわれわれの闘いは、1月7日の第5別館実力封鎖でついに口火を切ったのだ。だが、そこまでに至る過程の中で、われわれは、数かぎりない裏切りや苦汁をなめなければならなかった。われわれの闘いの前史は、41年秋の「薬学部新設、父兄会費値上げ案」反対闘争に始まる。マスプロ教育の御多聞にもれず、関学もその例外ではなく「水増し入学、教室不足」が甚しく、年度の初めには「立ちんぼ授業」が続出し、悪らつな勉学条件のもとに放置されていた学生の不満が、「既存学部充実せよ」のスローガンのもとに一挙に爆発する。だが、学院当局は「薬学部新設、父兄会費値上げ案」をあっけなく白紙撤回し、決定的な政策転換を成し遂げた。

あにはからんや、その次の年度には、われわれの闘いを逆手に先取りした形で学院当局は「既存学部充実のため」と銘を打って43、44年度連続学費大幅値上げを打ち出す。彼らの意図は設

備拡大→マスプロ教育による安価で大量の労働力商品の育成にあったのではなくて、設備充実→ミニプロ教育のもとに「心に日の丸、手には技術をもった」資本にとってはより優秀な排外主義的労働力商品の育成を手がけはじめたのだ。これに対するわれわれの闘いは、学費大幅5割アップと非民主的決定という学院当局の暴挙に対する怒りに支えられ、水ぶくれ状態のうちに進行し、法、社、文、商の四学部で続々とストライキ突入をかちとるのである。だがしかし、われわれの打倒すべき主要な対象は決して学院当局の政策でも、反動的教授でもなく、まさに“平和”と“自由”に訓化されてきた自己自身であるという教訓を闘いのなかで知ったのは、後期試験を直前に続々とバリケードが解除されていった時のことであった。右翼の個人テロが横行し、学院当局は居なおりを開始し、ストライキを支持していた学生が脱落していったように、まさに闘いの極限状況の中で、人はそれぞれの本性をむき出すものである。

……長い沈黙の後、第5別館実力封鎖は、これら総体に対する“ノン”を軸に展開されていく……。



<1・24全学集会>



マスプロの拠点である第5別館封鎖に始まる6項目要求闘争は、1月24日、沈黙を守り続けた学院当局と後期試験に流れる大衆を登場させた。当局は、全共闘の追求に何も釈明できず、收拾策動の場が大衆団交の場となり、あわてふためいた当局はその場を逃亡。2,000名にふくれあがったデモ行列は、「6項目要求貫徹、封鎖貫徹」のシュプレヒコールで道路を埋め尽くした。その後全学封鎖体制、入試阻止へと闘争はエスカレートするなかで、水を吸い込んだ部隊の動向に関学闘争のカギがあり、体質がある。













No522 1968-69 全国学園闘争の記録 関西学院大学編 その2

今回のブログは、6月7日の No519 で掲載した関西学院大学闘争の記録の続きである。1969年1月にバリケード封鎖された校舎内の写真と、「卒業拒否者の独白」を掲載する。

まず、1969年1月の各学部封鎖の経過を、この冊子に掲載された「闘争日誌」で見てみよう。

【闘争日誌】(関学闘争の記録より)(抜粋)

69.1.6 全共闘会議で、第5別館封鎖派(社闘、フロント、社学同、人民先鋒隊)と
反対派(反帝学評、学生解放戦線)に分かれる。

1.7 第5別館実力封鎖。全共闘(社闘、フロント、社学同、人民先鋒隊)30人、6項目要求貫徹、
全学スト体制の構築めざす。この日から右翼の攻撃に備え、ゲバルト訓練始まる。
反帝学評、学生解放戦線派は「ショック戦術だ」と封鎖に批判、クラス、サークル末端から
の組織化めざす。

1.10 学長、退去命令発す。「封鎖は大学の自治を根底から破壊する行為だ。ただちにこの不法
行為をやめよ。いまからでもおそくない。すぐ退去して第5別館を正常な状態にもどすことを
命じる」

全学執行委員会(反帝学評系)、学院当局に6項目要求に関する対理事会団交を要求。

1.11 法でスト権確立投票始まる。

1.17 学院本部実力封鎖。全共闘(社闘、社学同、フロント、人民先鋒隊)60人、未明に机、イスで
バリケード築く。

学院当局、「第5別館、本部の建物の封鎖が続く限り、大衆団交に応じることができない」と回答。

- 1.18 法、無期限ストに突入。この頃サークル闘争委結成され、以後講演会活動やすわり込み運動を展開。
- 1.21 文闘委、教授会に大衆団交求め、昨年12月東山学部長が署名、捺印した10・21反戦闘争弾圧の自己批判書と大衆団交開催するとの確認を反古にした理由を追求するが、教授会「何も答える必要ない」と突っぱねる。
- 1.24 全学集会開かる。これは学院当局提唱による、第1回目の収拾策動であったが、全共闘ヘルメット部隊150人が介入、大衆団交に切り変える。しかし、院長、学長は一切の釈明をしないばかりか、その場から逃亡を図り、一般学生6,000人の怒りを買った。その後、2,000人の学内大デモを展開。右翼学生職員なぐりかかり、20数名重軽傷。この頃から全学1連協、体育会有志連合、キリスト者反戦連合が、活発に動き出す。
- 1.25 商、スト権確立投票開始。 —
- 1.26 社闘実力部隊30人、未明に、社会学部校舎を、実力封鎖。
- 1.27 神、無期限ストライキに突入。経済学部集会開かる。
右翼学生に守られた教授、大衆団交に切り変るや逃亡。新川執行部、これと同時に「闘争の責任負うことできない」と解散声明。以後、経執行部不在。
- 1.28 全共闘(社闘、フロント、社学同、人民先鋒隊)200、深夜に文学部校舎にバリケード築く。
- 1.29 文に引き続き、未明、経も実力封鎖。これで理を除く全学部で封鎖体制を確立し、当日から始まる予定であった後期試験すべてが無期延期となった。



<卒業拒否者の独白>

'60年以降のあまりにも長い、陰湿な空白は、「批判」することによって「人間」の歴史が形成されるかのように、自己を対象化することなく、自らを「人間」という述語へ転化させ、現実の社会状況のなかで、その述語を未曾有のカテゴリーへと転化させようことを信ずるインテリゲンチヤー達の己惚によって埋められようとしてきた。現実の幻想性に拝跪すれば果てしない地平を、現実そのものにまで引きもどす不断の「人間」の行為を放棄した、世界風物劇場の舞台に、こわれた第2バイオリンの悲痛な主題をかなでながら登場する主人公の戯言は空虚な光束の中に死滅しようとしているのだ。

その空虚な光束の中にこそ、われわれの現実そのもの一闘争の立脚点があるのだ。だが、その立脚点が「自己否定」などというドラマチックな言葉にすりかえられてはならない。いったい、'67年10月8日の学友の死が、鮮血が「自己否定」などという排泄物によって表現されるものでしか

なかったのか。そのような言葉で美化されうるものだったのか。「闘争」が美化されて語られるのは、世界風物劇場の舞台だけでたくさんだ。

逆立ちして眠れー卒業拒否者の独白ー

ともかく、いかに無内容なものであろうとも「大学卒」という資格が現在の社会体制の中で一つの特権的で有効なパスポートであることは否めない。しかし、この闘争はそういった一切の体制によって与えられるものとしての無意味な特権に対して〈否〉と叫ぶところから開始されたのだ。独占資本に奉仕するための人間を造るための一連の教育を拒絶するところからー。

この闘争の最初の段階から、後期試験ボイコット、入学試験粉碎、卒業拒否は運動の一連の流れとしてあったはずである。しかし「入試実力粉碎」を叫びつつも「卒業」や「進級」の意味がわれわれに切実な問題としては突きつけられていなかったことも否めない。そして第5別館、法学部での〈死守〉ーそれは、この闘争が、あくまでも権力に対する非妥協的な永続的な闘いであることをわれわれに指し示した。

3月になり、卒業試験がレポートや認定などの種々の巧妙な、そして無内容な方法に切り換えられて学院側から打ち出され、卒業見込者としての僕達に突きつけられてきたのだった。形式だけのレポートや曖昧な認定や面接が無意味なものとなりながらも一枚の「卒業証書」を受け取るために多くの友がレポートを提出し、認定され、そして卒業していった。しかし、卒業拒否した僕の中に、卒業していった者と殆んど同質の問題があり、それが解決されないままに卒業拒否を決断したのだと気づいた時、僕のゲバ棒は外部の敵と同時に僕自身の内部へも向けられなければならなかった。

「卒業拒否」というのは国家権力に対する永続的闘争宣言であると同時に、過去 20 余年に渡って触まれてきた僕の内部の小ささを歴史に対する〈否(ノン)〉である。人間は本来、自由な存在としてあるはずである。20 余年に渡る体制の、僕に対する変形作業は、僕を変形し、歪め、そして一個の体制に奉仕する奴隷を造りあげようと仕組まれてきた。奴隷にされかかっていると気づき、人間としての自由を願った時、僕は僕自身に付きまとう全ての存在を一つ一つ検討してみなければならなくなった。教育、家族、美的感覚……。これらの一つ一つがいかに歪められ、変形されて、体制の奉仕者を造りだそうとしていることか！

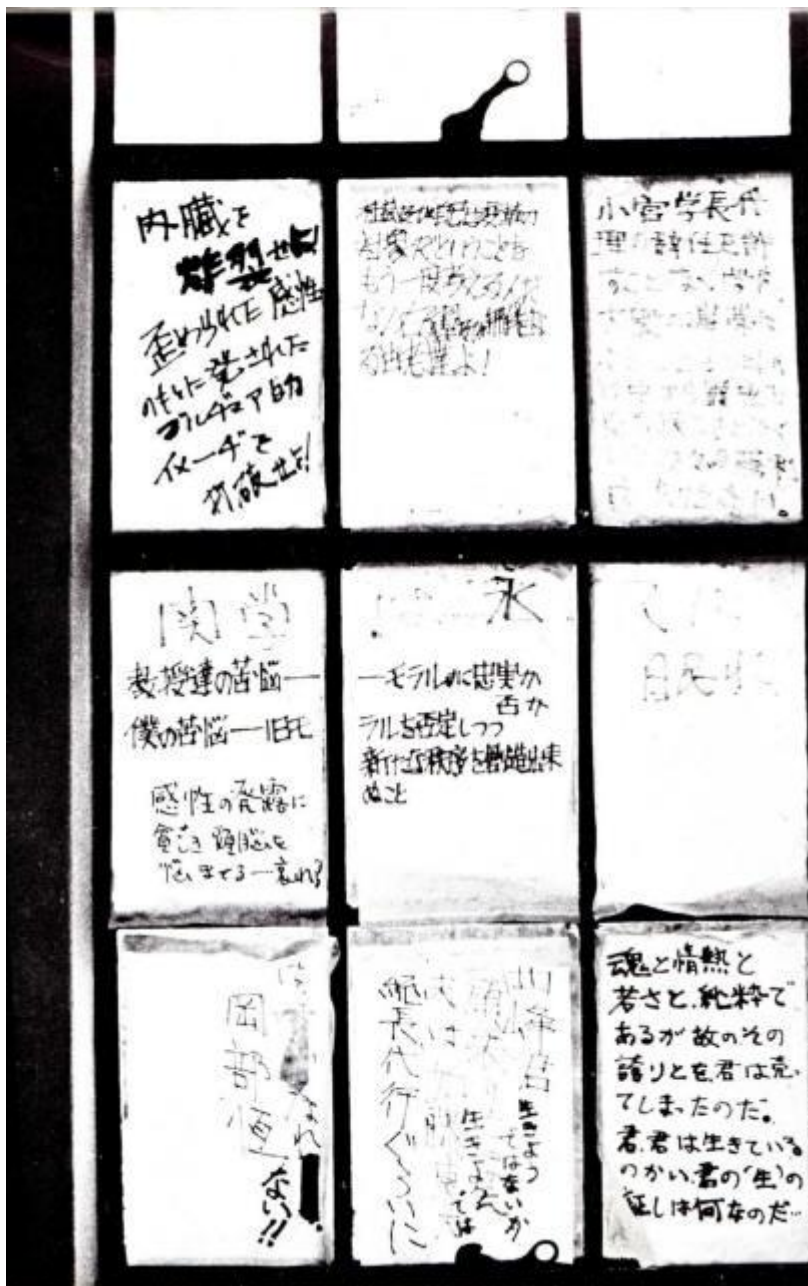
個人的なレベルで語られる欲求の多くが現体制を認めるものであり、というよりは意識の如何にかかわらず体制に積極的に参加するものであり、「卒業しても闘う」などと未来形で語ることは現在を抹殺した二元的な欺瞞でしかありえない。個人的な特殊欲求が、闘う姿勢につながり、なお普遍性をもちうると言う時、そこには厳密な科学性を必要とするのだよということを忘れてはなるまい。体制的存在者としての僕が、僕の個人的特殊な欲求を持ったまま、その特殊な欲求を追求することによって普遍的な反権力闘争を、行なおうとするのは、至難のことである。一つの自己の過去の歴史に対して〈否〉を発することによって切り裂れた僕の歴史が、大きな人間の歴史に参加するためには多くの弾圧が加えられるだろう。しかし、人間として己れの自由を選択することによって全ての自由を選ぶのだという確証がなくて誰に対してゲバ棒を向けることができるのだろうか。

しかし、卒業レポートの締切日までに「卒業」することの意味や「卒業拒否」の内容などの討論が進まず、「卒業拒否」は個人的な内部意識のものとなり、ただ個々の内部で一つの行為を“決断す

る”か”否”かのみが問題となり、組織的に運動化することのできなかつたことは否定的に総括されねばならない。

4月になり、桜が咲き乱れ、4連協の部屋も寂しくなっていた。とり残された空しさみたいな、一人だけで観客のいない舞台上で気張っているような奇妙な空白感が僕の中にはある。しかし、今こそ僕は、真の連帯の意味や闘うことの意味が解りはじめているのだと考える。闘いは続くだろう。更に新たな闘いの姿勢が僕の中に構築されねばならない。

横になると、条件反射で／すぐ眠ってしまう僕に／君は〈自己変革〉を迫る／逆立ちして眠ることなんか／僕は出来やしない(文学部内の壁の落書き)
あえて言う。逆立ちして眠れ！と。



社会学部への吊辞

青く澄みわたった上4原の台地に
キリストの笑名の陰に過去今まで
俺達を幻想の枠内に止めていた社会学部よ
俺達は今までにあなたの幻想を断ち切り
未来に向って飛び立たんとするのだ
さうだ決して俺達はその歩みを止めはしないのだ

中核

5Gの時は
どの様な
刻み方をするのか。
誰がその歯車を
運動させるのか。
それが知りたい。

5Gから見える
時計台には
針はふろか
文字盤とえない。
他の三方から見ると。
秩序正しい歯車によって
時を刻んでいる。

-2.2 '69-

言 争 闘

これらの口には誠がなく、

その腹は裁かの淵

のとは周いた基

舌は死をもたさず、

神よかれらを救はし

そのばかりことにて自裁させ

その多くのとかゆえに

かれらを投げ落して下さい

あなたにせむいたからです

(詩篇五九・二)

重苦しい状況の中、我々は今立ち上り、人間のあらゆる行為が平等に相対的であり、あやまちに満ちたことを知りつつ、それ故に神の救と導いと求めつつ、

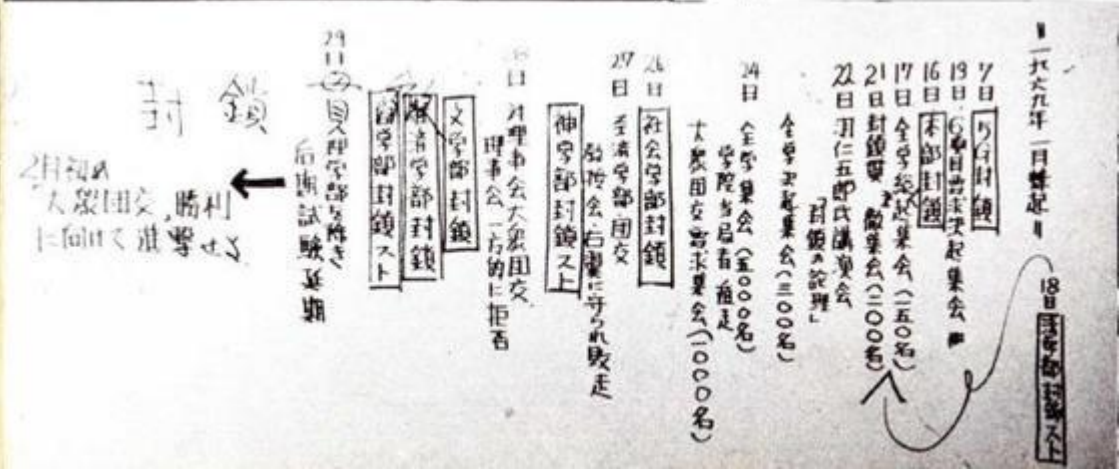
この現在の状況に對して我々は我々の今存在をかけた大胆に切り込むことを決意した。昨年夏、学務当局は「学院の発展」という理由で、毎々年度通算値上げを行なう。そしてその反打闘争に對して徹底した神圧を加え、春三月には学生の大量処分と機動隊導入をも、当局は完全に学務闘争を鎮静せしめた。

我々は現在まで自身の闘争に於て学びを続けて来たことを心に恥し、何故ならそれはまさに自己肯定によるもの、学院の学務肯定であり、学院当局および教授会が腹面もなく語るといふ、クリスト教主義人格教育なるもの肯定を意味するからである。

しかしながら我々は、ついに自己自身を拒否しなげはならぬ。同時に、我々共に学務学部のものを構成して居る学院当局と、そのクリスト教主義をも否定せねばならぬ。それと我々のハリケートを築くもの意味である。我々は、六項目要求もかけ、その背後の学院クリスト教に對し、根底的批判を加え、そのため我々はハリケートを解のす、系統的に闘争続けることを宣言する。一九六九・一二

神学部学生会

まじれの犠牲のみかあつて
 加害の最終責任がどこにも
 見えない、大魔術区見事に
 口づきの口化、学院当局、
 各協会に対する初めついで
 見送ること
 本部封鎖である



知分の製造人とかよ
 我々の深き憎悪を社会学部
 を泥沼の渦中に引きずり
 田、万成、田中、島原、飯家、丹羽、楢、その他小物

NO523 1968-69 全国学園闘争の記録 関西学院大学編 その3

今回のブログは3回目、7月19日の No522 で掲載した関西学院大学闘争の記録の続きである。1969年2月の入試粉碎闘争と学館前座り込みの文章と写真、新聞記事を掲載する。まず、1969年2月の入試粉碎闘争の経過を、この冊子に掲載された「闘争日誌」で見よう。

【闘争日誌】(関学闘争の記録より)(抜粋)

- 2.4 全共闘「入試実力粉碎」の方針打出し、泊り込み強化。これに対し武田教務部長、「全共闘側の武装阻止にも素手で立向う」と言明し入試会場は体育館と中等部、高等部校舎を使用することに決定さる。
- 2.6 全共闘武装部隊 80 人、学院当局に雇われた右翼学生 200 が看守する体育館を未明に火炎ビンと投石で攻撃し、右翼学生を完全に粉碎。院長は、5時 10 分に機動隊導入を要請。早朝から「入試粉碎、闘争勝利」のシュプレヒコールで学内を武装デモ。午後1時、機動隊 500、正門前に待機し、その場で、松田政男氏の講演を聞いていたサークル闘、全学1連協、キリスト者反戦連合の学友 300 人と対峙。午後2時機動隊、試験場防衛のため、体育館、中等部、高等部に配置さる。学生会館前で、2,000 人の学友、機動隊導入に反発し、徹夜ですわり込む。
- 2.7 経済学部入試始まる。午前8時 20 分、担棒とヘルメットで身を固めた全共闘 80 人、機動隊に突入。7名が不当逮捕さる。引き続き、入試終了直後、再び機動隊と激突。すわり込み部隊 500 人に減る。入試実現派 300 グランドでデモ。
- 2.8 商学部入試。全共闘、第5別館と法学部のバリケードを強化し、機動隊の強制解除に備える。







入試粉碎闘争は、2月6日未明、全共闘武装部隊 80 人が、火炎ビンと鉄パイプを武器として、入試会場にあてられていた体育館、中等部、高等部周辺にむらがる右翼、体育会系学生、教職員 250 を完全に粉碎した時点にはじまる。全共闘は、6項目要求関する対理事会大衆団交予備折衝を積み重ねてきたが、学院当局はこれを拒否。彼ら当局の意図は、大衆団交を一般的な「おしゃべり」の場にする事だったのである。

入学試験を契機に、関学闘争は質的転化を遂げた。すなわち、学園闘争史上、はじめての関学入試粉碎闘争が、12 月以降の6項目要求闘争という個別学園闘争の枠を突き破り、大学の存在そのものを突き崩す闘いとして闘いとられたということである。関学 80 年の歴史を“マスター、フォア、サービス”の下に窒息せしめ、労使協調のイデオロギーに毒された中堅サラリーマンを大量に育成し、関西財界に売り渡し、なおそのうえ“入試実現”によってブルジョア大学としての延命を謀らんとする学院当局と、そしてそれを強要してきた資本制国家 100 年の日本の社会総体に対

する闘いが入試粉碎闘争であった。

そしてこの闘いは、大学の解体を要求するばかりか、国家にとっては資本制分業生産の一時的麻痺を意味することから、それを維持、回復せんがための機動隊＝国家の暴力装置の反革命的介入は必然のことであった。そして、その時まさに「関学の栄光の歴史」は、もろくもくずれ去ったと言ってもよいだろう。

これに対し、「学問の自由」なる関学の危機を即自的に感じはじめた多くの学生大衆は学生会館前に座り込み「機動隊導入弾劾」のシュプレヒコールを繰り返した。グランドでは、右翼系学生 500 の「入試実現」の垂れ幕もたれていた。







学内に押し入ろうとした機動隊を、学生会館前まで押し返したデモ隊は、その場で抗議の“座り込み”に入った。

“機動隊導入弾該！入試粉碎！”のシュプレヒコールは、われわれの団結と連帯感を呼び醒し、時間の経過は、闘争の限界点を示した。

全共闘、右翼、機動隊、そしてこの座り込み部隊の対峙関係の中で、座り込みは、夜を徹して闘われた。

しかし、自己目的化してしまった座り込みは、重く沈み、次第に生気を失っていった。

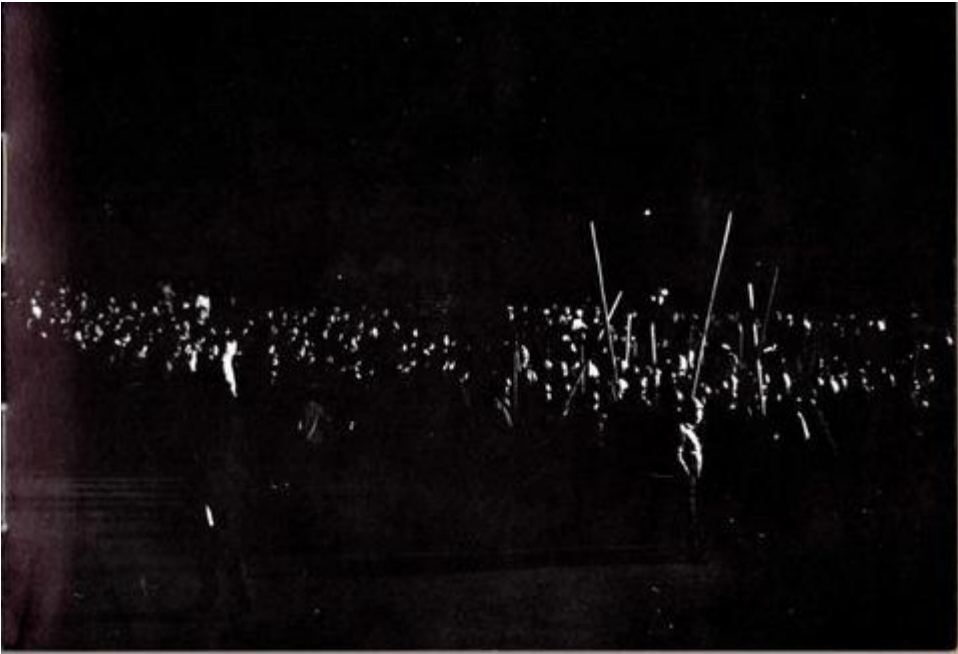


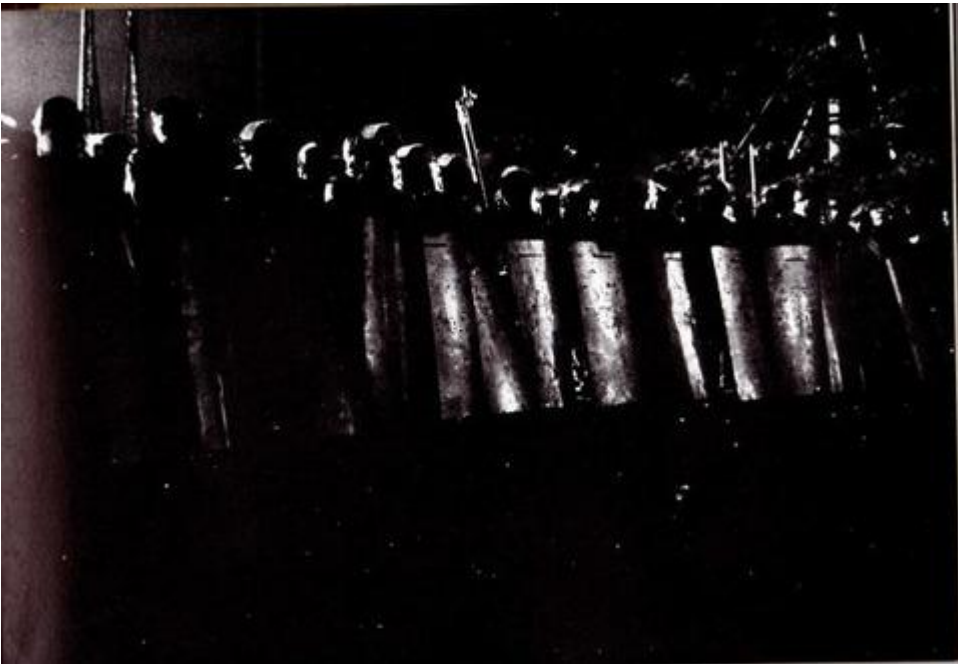
2月7日、経済学部入試が、機動隊 250 の警備のもとに実施され、全共闘 60 名が午前、午後の二度にわたって機動隊の阻止線を突破するために衝突、学生会館前に座り込んでいたサークル闘、全学一連協の学友を踏みつけて、機動隊は、法学部校舎のバリケードを解除する構えを見せた。

これに対して、全共闘は「バリケードを断固死守する」方針を打ち出し、深夜、徹夜の座り込み部隊とともに武装デモを行い、バリケードの強化にとりかかった。

「機動隊に警備を願っているは、入試実施のためだけであり、学内のバリケードには手をふれさせない」と言明していた小宮学長は、ここに至っては、全共闘を機動隊に売りわたす他になすすべがなかつたのか、9日早朝、機動隊 2,500 が、第5別館を包囲し、激しくガス銃を撃ち放ち、薬物入りの放水を浴びせかけてきた。











【騒然と初の“警棒入試” 関学】毎日新聞 1969.2.7(引用)

受験生がかわいそう “むしろ延期を” 府警にがい顔

「入試反対」「警官帰れ」兵庫県西宮市の山手の学生街を揺るがすシュプレヒコール、ヘリコプターの爆音—警官のヘルメットと警棒に守られた関西学院大学入試は、大学入試の常識とおよそかけ離れた狂気と騒乱に包まれた。全国での初めての異常な入試に受験生たちは「紛争最中の試験だから、ある程度は覚悟していたが、後輩の試験だけは静かに受けさせるだけの先輩の思いやりが欲しかった」と嘆いていた。

ゲバ棒をつ持った共闘会議派、すわりこみだけのノンセクト学生、スピーカーでがなりたてる入試賛成派、それに警官隊—7日、関学大キャンパスの朝は「四すくみ」の形で明けた。その渦の中で入試は強行された。

午前7時ごろに機動隊約700人が試験場の体育館前道路をジュラルミンのたてで封鎖した。そこから約100メートル離れた地点につくられた全共闘のバリケードには石の山がどんと築かれた。

大学正門はイスのバリケード、立看板、旗—ぴったり閉じられ、受験生シャットアウト。午前8時ごろから集まり始めた受験生たちは試験場を案内する地図を受け取りながら戸惑い気味。「案内します」「試験場はこちら」白腕章の大学職員が声をからすなかをグラウンドから体育館など試験場へ。

午前8時15分、全共闘の学生約70人が投石を始めた。石は警官のタテに当たってガンガン鳴りつづける。機動隊員は守勢一方。たまりかねた機動隊の投げ返した石が間にすわっていたノンセクト学生の中に落ちる。数分後、横から回り込んだ30人余の機動隊員が攻勢に出た。その前にノンセクト学生が立ちふさがり、機動隊員に「帰れ」「帰れ」と連呼、とうとう機動隊を押戻し、投石はやんだ。

学生と警官の衝突をまのあたりに見た受験生と父兄たちは「覚悟していたが、こんなにひどいとは。子供がかわいそうだ」とショックの大きさに声も小さい。大阪市からきた母親は「せっかく勉強してきたのだから、ベスト・コンディションで受けさせてやりたい。試験が始まるのを見届けたら先に帰るつもりでしたが、これでは心配で帰れません」と試験場に消えてゆくわが子を不安げな目で見送っていた。

受験生の一番乗りは午前7時すぎ、山口県柳井市から来たA君(18)。「旅館にいては落ち着かないし、大学の異様な姿をこの目で見てやれと思って早くきた」というが、学生と警官がにらみ合う状況を見て「やっぱりいやですね」とぼつり。

試験は3会場とも定刻9時に始まった。次第に増える機動隊員がその周辺を固めている。6日未明、たたき破られた体育館の窓やドアにはベニヤ板が打ちつけられ、寒風はかろうじて防がれていたが、監督官室などはあん幕でおわれただけ。

明石市のある父親は「このような異常な状態で、入試を強行する大学側の態度が理解出来ない。現時点で入試がむずかしければ延期するなり、何らかの方法があったはず」と吐き捨てるような口調。

一方、ある母親は「入試に反対する学生さんの気持ちもわからないわけではないが、受験生にとって入試は一生を左右する重要なものです。この大学を目指して勉強してきた受験生のために大学が機動隊を導入したことも、受験生を守る意味で仕方ないことだと思います」としんみり。父兄の意見も賛否両論だった。

小宮孝学長代理の話

外の騒がしさが試験場内に聞こえるのではないかと心配したが、構造のせいかなので安心した。欠席者が少なかったのは受験生の真剣さの表れで、強硬してよかったと思う。14日まで機動隊にお願いして妨害は実力で排除してもらう。

答案、頭にはいらぬ

正午、昼休みで出てきた受験生たちの多くは、外の騒ぎを「少しは聞こえたが、解答に一生懸命だったから…」と話していたが、奈良市から来た受験生は「二時間目の国語で長い説明文を読んでいる途中、再三のシュプレヒコールがうるさくて、初めから読み直した」と憤然とした面持ち。また、親子連れの一組は「もし息子がパスしても、入学式のことを気になりますね」ときびしい口調だった。

NO527 1968—69 全国学園闘争の記録 関西学院大学編 その4

今回のブログは4回目、8月2日の No523 で掲載した関西学院大学闘争の記録の続きである。1969年2月の第5別館法学部死守闘争の写真、新聞記事を掲載する。

まず、1969年2月の第5別館法学部死守闘争の経過を、この冊子に掲載された「闘争日誌」で見よう。

【闘争日誌】(関学闘争の記録より)(抜粋)

1969年

- 2.8 商学部入試。全共闘、第5別館と法学部のバリケードを強化し、機動隊の強制解除に備える。
- 2.9 第5別館を除く全校舎バリケード、機動隊2,500によって強制解除さる。早暁、兵庫県警は大坂府警の助けも借り、第5別館と法学部校舎にたてこもる学友48人を、ガス銃と放水で攻撃。法学部は、午前9時半に解除されるが、第5別館死守部隊35人は、徹夜でこれに応戦し、そこにかけつけたデモ隊2,000人と熱い蓮帯を交わす。法、全員逮捕さる。
- 2.10 30時間にわたって闘い抜いた、第5別館死守部隊35人、午前11時50分、ガス銃、ヘリコプター、消防車などの権力側の武器に屈す。警棒で乱打され、催涙ガス液を浴び、屋上から階下へひきずりおろされたりしたため、全員が、火傷、打撲傷を負い重傷。
- 2.12 「全関西労学関学奪還総決起集会」に3,000人。午後3時すぎ、正門近くの上ヶ原派出所を投石で襲撃。3人が不当逮捕さる。
- 2.14 機動隊常駐解かる。入試全学部とも終了。
- 2.15 全共闘、「機動隊導入による強権的闘争圧殺」に抗議して、法、文、商、社、経、神の学部校舎を再封鎖。サークル闘も、学館を占拠し泊り込む。学院側、「ロックアウト」を宣告。
- 2.17 県警、被逮捕者の自宅、下宿など22か所を強制捜査。
- 2.18 学院本部再封鎖。
- 2.19 同窓会館を封鎖。
- 2.21 第1教授研究館、同別館、第2教授研究館の3建物をバリケード封鎖。キリスト者反戦連合も、宗教センターとランバスチャペルの自主管理に入る。
学院側、26、27日に「全学集会」を開催する旨を、全学生に文書で配布。

<第5別館 法学部死守>

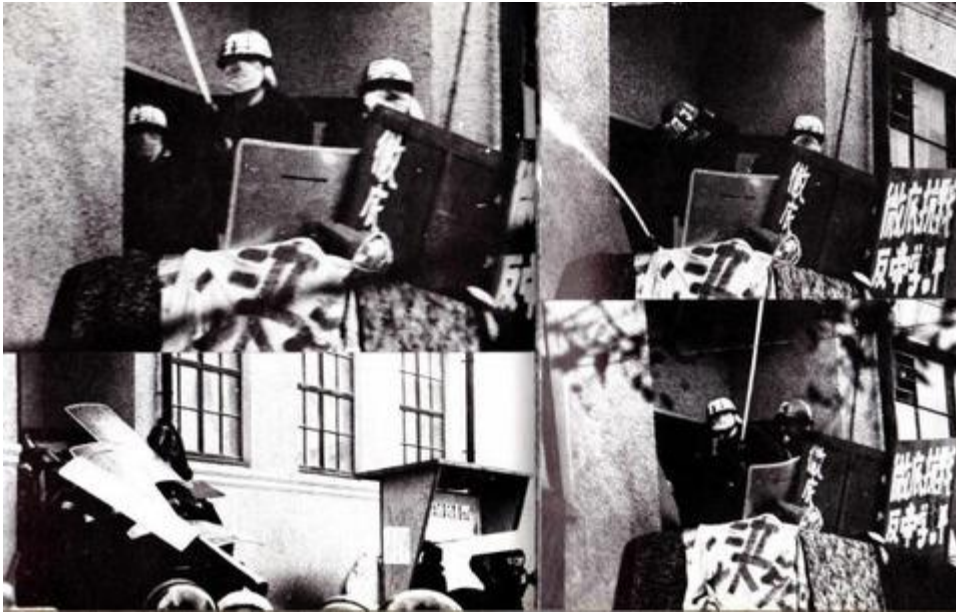


法学部学舎内の学生
などの諸君、大学業務上
必要があるので、直ちに封鎖
を解き、建物から出て、
学外へ退去して下さい。

昭和四十四年二月九日

関西学院院長 小宮 孝
関西学院大学学長代理





【関学に機動隊 一か所を残し排除】毎日新聞 1969.2.10(引用)

兵庫県警は9日、警察官の警備の下で入学試験を続けている関西学院大学(同県西宮市)の要請で、大阪府警の500人を含む2,500人の警察隊を動員、占拠学生ら20人を逮捕して法学部本館など11ヶ所の封鎖を解いた。しかし、第五別館は学生の抵抗が激しく、警官3人が重症、26人が軽傷、学生8人も負傷するなど危険なうえ夜にはいったので、解除を10日に持ち越した。

この日大学当局は午前7時前、占拠学生に退去命令を出し、そのあと機動隊が正門など二ヶ所から構内にはいった。19ヶ所の建物には学生がいなかったため、それぞれ約30分で封鎖を解いたが、法学部本館、第五別館では泊り込んでいた約50人の学生が嚴重なバリケードをタテに放水、投石で激しく抵抗、警察官はガス弾を撃ち込みながら突入し、約2時間半後、まず法学部本館の解除に成功、占拠学生13人と学外に逃げた7人を逮捕した。

しかし第五別館では鉄筋4階建ての各階に机、イスのバリケードを二重、三重に築き、約30人がたてこもって抵抗、警官隊は電動ノコギリでこれらを切り落とし、ガス弾を撃ち込んで1階ずつ進んだところ、学生らは火炎ビンを投げ、イスに火を付けて屋上に逃げ、屋上出入口を封鎖した。警官隊は4階天井を削岩機でくり抜いて突破口をつくったものの、多くの重軽症者を出したため、同日は排除をあきらめた。











NO528 1968—69 全国学園闘争の記録 関西学院大学編 その5

今回のブログは5回目、9月27日の No527 で掲載した関西学院大学闘争の記録の続きである。1969年2月の法、文、商、社、経、神の学部校舎の再封鎖の写真とノンセクトの動向について掲載する。

まず、1969年2月の闘争の経過を、この冊子に掲載された「闘争日誌」で見よう。

【闘争日誌】(関学闘争の記録より)(抜粋)

1969年

- 2.15 全共闘、「機動隊導入による強権的闘争圧殺」に抗議して、法、文、商、社、経、神の学部校舎を再封鎖。サークル闘も、学館を占拠し泊り込む。学院側、「ロックアウト」を宣告。
- 2.17 県警、被逮捕者の自宅、下宿など22か所を強制捜査。
- 2.18 学院本部再封鎖。
- 2.19 同窓会館を封鎖。
- 2.21 第1教授研究館、同別館、第2教授研究館の3建物をバリケード封鎖。キリスト者反戦連合も、宗教センターとランバスタチャペルの自主管理に入る。
学院側、26、27日に「全学集会」を開催する旨を、全学生に文書で配布。





【ノンセクトの生誕とその動向】

革自同〈革命的自立主義者同盟〉

明確な政治綱領と総路線を持った政治同盟ではない。社闘内部のある集団に対してつけられた名前であり、日常生活構造批判という論文を中心に結集したノンセクト活動家の集団である。彼らの問題意識は、'66年の薬学部闘争に始まり、'67年学費闘争の敗北過程に既成学生運動批判という形で、新鮮な問題意識をわれわれの前に提出した。大衆の意識構造の分析の中から、自分自身一個の大衆としての自己否定と、それを軸にした対象変革運動を通して、大衆の意識構造の中にくさびを打ち込んでいく彼らの運動輪は、既成学生運動全体に痛烈な批判をあびせかけていった。

彼らの論理は今年の6項目要求闘争の中で具体化され、闘争の中で欠くことのできない存在として登場している、縦に二本の白い線の黒いヘルメットをかぶった彼らの姿は、闘争のあらゆる所に登場し、兵庫県警をふるえあがらせた革自同は、同時に、第5別館死守闘争をになった中心的な存在でもある。

しかし、総路線と明確な政治戦略を持ちえない彼らは、全国学園闘争の展開の中で、個別闘争を突破する方針は提起しえても、全国政治闘争としての方針を提起しえないという限界性をもっており、この事は、革自同に結集する個々の活動家の今後の課題として提出されるだろう。

キ反連〈キリスト者反戦連合〉

キ反連は、闘争80年の〈キリスト教主義〉への葬送と帝国主義約再編の中で、人民抑圧政策を支えるものとしてある〈建国記念〉〈靖国神社国営化〉への粉碎、阻止闘争に取り組んでいった。これは〈キリスト教主義〉なるものが現実状況の中で、果して存在し得るのか否か！という本質的な問いから出てきたものであり、真に牧歌的ムードの中で醸成されてきた自己への闘いであり、反キリスト教的教育を続ける学院権力への鋭い攻撃であった。

2月21日宗教センターを自管理、ランバス・チャペルをバリケード封鎖し、闘いの戦列に加わった。しかし政治方針のなさと同時に、閉鎖的状況はぬぐいされず、この闘争を担う部隊として形成され得なかった。同志社やその他の神学部との横の連帯を志向している現在の状態に今後の飛躍があるのでは!?

サークル闘争委

1月18日、文化総部常任委員会の提唱により、生協、新聞総部、総部放送局、その他同好会の参加のもとに、サークル闘が結成された。ここで特筆すべきことは、昨年の文総の体質改善運動の展開と今年の闘争へのコミットという歴史的事実である。混迷と停滞の中にあり、事務執行機関に転落した執行部の解散と規約改正、そして“状況に基く文化サークル運動を”とのスローガンを掲げた新執行部の成立があった。

そして学生会館を拠点にしているサークル闘争委は、6項目要求闘争を闘う中で学生会館自主管理を主体的に担うとの方針のもとに、講演会活動、クラブ、クラスオルグ、入試阻止座り込み闘争を展開した。

以前までは闘争圧殺の担い手であったこの部隊が主体的に闘争に参加したという大きな事実があるか、この闘争の頂点である入試粉碎闘争において、情勢分析の甘さ、政治方針の欠落が指摘され、大衆動員主義に陥る限界を持っていた。しかし12月12日“機動隊大学を、再度われらの手に”と全学的に学園奪還闘争が展開される中で、全共闘とともに学生会館主事室を占拠し、自主管理体制に入った。

厚生補導の場として、学院権力のヘゲモニーに包摂され、箱庭的文化運動を続けてきたわれわれの訣別の辞であった。そして学館をゼミ討論、クラス、クラブ討論に全面解放し自主講座を提起したのである。しかし文化運動論の軟弱さのために、次第にまばらになっていく学生の前に、この闘争の総路緑化を図る「核」として存在しえなかった。今後の〈自主講座運動〉の展開がサークル闘争委の課題であろう。

体育会有志適合

'66年の薬学部闘争、'67年の学費闘争、そして今年の6項目要求闘争においても、常に学院当局の尖兵として登場してきた体育会の中から、一部ではあるが反乱者が登場した。

直接的には1・24全学集会における学院当局への批判から始まり、数十人の学生を結集する中で、今までの体育会のあり方—自己の学生存在への追求を一切ぬきにして学院当局の論理に乗っかる中でしか行動しえない—そのものに対する批判を提出していった。

4連協〈4年生連絡協議会〉

43年度学費闘争において当時の4年生がスト解除＝闘争終焉の旗印をかかげて登場し、闘争壊滅の主要因となったことの総括の中から結成された4連協は、6項目闘争の中で、「卒業すること」とは、一体いかなる意味を持つのか、について本質的な討論をなしえず各学部4連協の意見調整機関としての機能を出なかった。

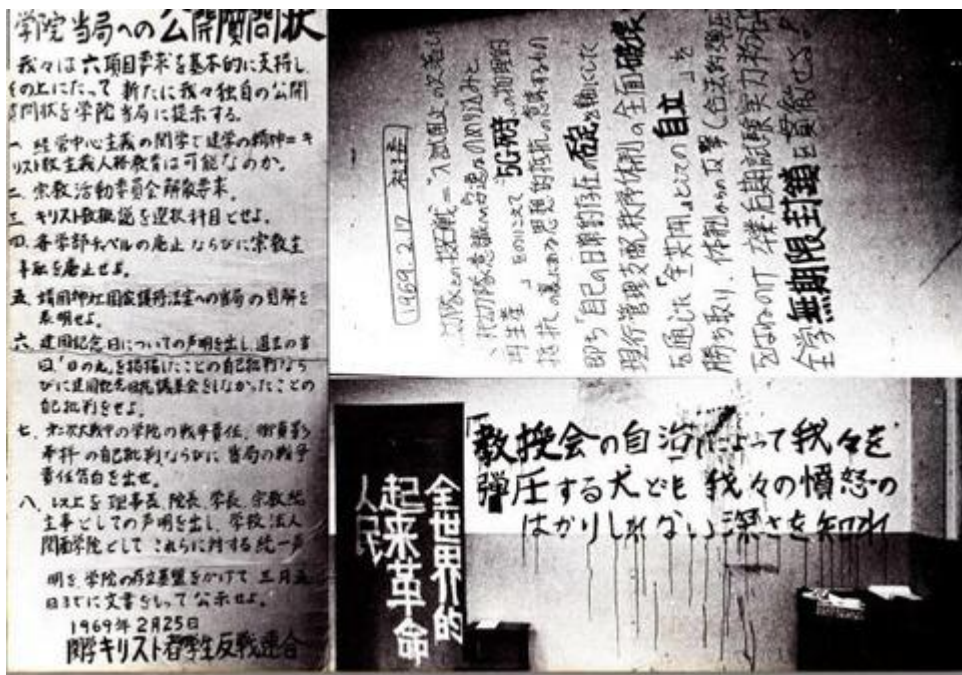
そのため各学部段階での計7名の卒業拒否者を出しながらも、それを全学4連協として深化できず卒業式を契機として崩壊の途を辿った。

1連協〈1年生連絡協議会〉

各学年別の連協組織は去年の学費闘争の過程にも結成され、各学部闘争委員会の組織的中軸として活発な活動を行っていた。しかし、去年の学費闘争は、各学部の枠を突破できず、全学的な組織として各連協が活動を開始したのは、今年の6項目要求闘争が展開されてからである。

各学部闘争委の連合体としての全共闘から闘いの実態としての全共闘への発展の中で、全学的な運動の展開を指向して結成された全学1連協は、2・6機動隊導入の際には、サークル闘とともに

に座り込み部隊の中心として活動を展開していった。しかし、いまだ活動家集団としての限界をもっており、政治焦点のある時には活動できるが、ない時には実態をもてないというのが現実である。



NO529 1968—69 全国学園闘争の記録 関西学院大学編 その6

手元に「関学闘争の記録」(関西学院大学全学共闘会議出版局発行)という冊子がある。この冊子と当時の新聞記事を中心に、何回かに分けて関西学院大学闘争の経過とその内容について掲載してきた。



今回のブログは6回目、10月11日の No528 で掲載した関西学院大学闘争の記録の続き、最終回である。1969年2月の全学追求集会の写真とその後の経緯について掲載する。

まず、1969年2月から4月の闘争の経過を、この冊子に掲載された「闘争日誌」で見よう。

【闘争日誌】(関学闘争の記録より)(抜粋)

1969年

- 2.26 全学集会粉碎総決起集会に500人。前日深夜、会場にあてられていた新グランドに当局がはりめぐらした柵を、全共闘武装部隊100人で破壊し、当日は早朝から武装デモ。一小宮院長、正午すぎに姿を現わし追求集会に切り変える。院長は、「機動隊の暴力は、法の名によって認める。入試は、社会的責任上実施した」と強硬に言い張る。その後、場を中央講堂に移し、ふたたび追求するが堂々めぐり。
- 2.27 前日に引き続き追求集会。院長、教授と右翼学生を動員して居直る。5日に対理事会大衆団交を開催することを確約し、解散。
- 3.1 全共闘50人、京大入試粉碎闘争に出撃。
- 3.3 小宮院長と26評議員全員が辞任。辞任理由は「健康上重責に耐えることができない。」とされていたが、実質には確認書を反古にするための闘争分断工作。
全共闘30人、神大入試粉碎闘争へ。
- 3.5 全共闘500人、「大衆団交破棄に対する学院当局弾劾集会」を開いた後、図書館、産業研究所、正門守衛室を封鎖し、卒業、後期試験などによる一切の收拾策動粉碎を決議。
- 3.7 法、教授会大衆団交開かる。教授会、「去年の処分を白紙撤回し、

今後一切の処分権を放棄する」という自己批判書に署名、捺印。

3.10 理学部実力封鎖。理闘委、教授会に対して「学院の入試強行に協力した」など6項目の自己批判を求める大衆団交を要求してきたが、教授会が、これを拒否したため。

これで7学部 全部を封鎖し、中央講堂、体育館だけを残すことになった。

3.11 教職員組合は職員集会を開き「関西学院の非常事態に際し全教職員に訴える」との大学への要望を採択。

3.13 社、卒業試験に、全共闘 50 人「試験ボイコット」のデモ。機動隊 50 待機。(神戸YMCA) 革新評議会学生ら、大阪駅前「全関学人は紛争解決のため、立ち上がれ」と訴え、48 時間のハンストに入る。

3.14 経、卒業試験。(大阪予備校)

この頃から、革新評議会、民主化行動委員会、法学部有志連合など右翼諸団体の組織化進む。

3.17 革新評議会による「事態収拾」集会開かる。全共闘 60 人、介入し、右翼学生 250 を追い散らす。経教授会、全共闘を支持する松下昇講師に、4月からの契約更新をしない ことを一方的に決定。

松下講師、これに対して「関学闘争で大学側が機動隊を学内に導入したことについて大学側は自己批判すべきなのに、それをせず、大学側の態度を批判してきた私をやめさせるのは教育者としても絶対許せない。私はどんなことがあってもやめない。一人でたたかう。」(3・18 朝日新聞)と語る。

大学評議会、28 日の卒業式中止を決定。

3.19 学長代行に小寺武四郎教授決定。「早急に新執行部を決めて正常化のために努力する」と抱負を語り、「廃校か否か」のアンケートを全学生に配布。

「学内正常化のため」の商学部集会、200 を集めて大阪プールで開かる。

3.22 学長代理代行に城崎進教授就任し新執行部出そろう。

3.23 「学院正常化、全関学人総決起集会」開かれ、学内右翼諸団体、体育会系学生、教授、職員、父兄、OBなど 1,200 が結集。体育会系学生ら、プラカードを持って、集会を防衛。全共闘 150 人「右翼粉碎、封鎖貫徹」をシュプレヒコールし、これと対峙。午後3時になると、右翼学生 200 が、正門バリケード解除にとりかかったため、全共闘武装部隊、これらを完全に粉碎。機動隊 200 が出動。以後、右翼学生の組織化進まず。

3.28 「卒業ボイコット、6項目要求貫徹、中教審答申粉碎全学総決起集会」開かる。

3.29 小寺学長代行、退去命令出す。

3.31 小寺学長代行、再び退去命令出す。

4.1 休校処置(ロックアウト)解かれる。

4.5 「入学式粉碎、6項目要求貫徹、中教審答申粉碎」集会開かる。機動隊 300、正門前周辺で待機。学院当局、「新しい大学の創造にむかって」の第2回目のアンケートを全学院生に配布。

4.12 新入生歓迎総決起集会。約 100 名参加。

4.13 松下講師講演。第5別館屋上で文闘委の情況劇。

- 4.15 理、学外試験中止。レポート形成に切り変わる。他の学部もレポート形式による後期試験実施さる。
- 4.18 経済学部新入生オリエンテーション。大阪府警機動隊 100、大阪城周辺で警戒。全共闘 30 人が、阻止行動。
- 4.26 「安保粉碎、沖縄闘争勝利」の国際反戦闘争。京都、神戸、東京で関わる。全共闘 100 人これに参加。
- 4.27 社、学外試験が、機動隊 100、と右翼学生に守られ、三田市の湊川女子短大で行わる。全共闘 50 人、試験場に押しかけるが、阻止できず。
- 4.28 「首都制圧」沖縄闘争。東京、大阪など 20 万人が決起し、機動隊と激突。銀座、渋谷に「解放区」。関学全共闘からも東京派遣 20 人。





【進級拒否宣言】

〈学生〉に立脚点を持つ僕が今ここに進級拒否宣言をするのは〈学生〉であることを自主的に放棄するのではなく、より本質的な意味において〈学生〉であることを指向せんとするからだ。

いいかえれば、共同幻想としての大学に対して自己幻想を軸にした形で大学共同幻想を払拭していく作業を存在の地点で開始することを言うのだ。この6項目要求闘争が、個別大学社会内の問題としてかけられ、その問題が個別大学社会内の問題を内に含みながら、体制そのものに対する政治闘争として形成されていく現在にあって、当初、闘争の攻撃対象であった教授、良識学生等が闘争に触発され、学園の正常化を何よりも希求し、問題の解決を事態の技術的な処理としての大学内制度改革、変革に收拾を見出す時、この闘争を一貫して担ってきた者と虫のいい收拾者の間には再び敵対が表面的にも現象する。

このことは、6項目要求闘争が改良(制度的変革)の契機を内に孕まざるをえない側面より出てくる結果としての大学共同体幻想(特権的知識人=教授、良識学生の〈誠実〉なままごとである制度いじりの上に確立されようとしているより進歩的な、より近代的な外形を持った体制内大学)へのよりラジカルなあるいは、より自由な地点からの永続的な〈否〉の闘争を組むことを示す。そしてそれは同時に僕が意図的により自立した本質的學生を追求することになる。さらに「革命闘争の主体は労働者であり、階級の否定はプロレタリアートの止揚なくしては……」と言うマルクスの言葉を一面的に認識し、一定大学時代は学生運動をやり、一年程恰好つけて留年でもし、学校を卒業すれば横すべりの労働者になり生産点につき、組合員になることがあたかも革命闘争を真に担いうる唯一のコースであるかのごときを語る職業革命家、あるいはその卵達の安易に通ります問題を掘り下げることとしてもある。現体制では、プチブルの域を出ない学生存在の、そしてその上に立つ学生運動を根底から否定する課題を持つ闘争として進級拒否がある。

今日まで闘争主体の学生期間をプロレタリアートへの移行期間として、運動は本質的にプロレタリアート側に立つ闘争として組まなければ云々、されてきた。それはプロレタリアートが革命の真の主体(このことは十分正しい)であり、学生運動はそれへの一方的な連帯であり、よりかかりでし

かない。学生が学生として立脚点において自立してこそ初めて相互の關係のラジカルな連帯を語りうるのだ。それすらできず、自分の学生存在が労働者に対して気はずかしいのだったら、即時学生を止めて労働者になり、労働者として自立して労働運動を推進させる方がましだし、誠実というものだろう。

以上のことは、全社会の中の一部の社会である大学の中において大学で革命を起す等ということではない。国家権力を頂として個々の社会が有機的に連結することで国家独占資本主義体制が形成されている中で、個別一社会の中でコンミュンが形成され、革命が起こるなどと夢想しているのではない。

個別社会の中で全体革命、つまり永続革命への視点をすえるなかから、個別社会内での闘争が改良的に転化せざるをえないことを把握し、そのことに永続的な〈否〉の闘争として、変革そのものを不断に革命する闘いとしてあるのだ。当然のことながら、そのように全体的革命を指向することの内には自己の変革も含まれており、ここにおいて自己はそのような革命の主体であると共に、革命を体現する対象でもあることを示している。

このことにおいて始めて全体という言葉単に対象の概念ではなく、方法の概念でもって用いるのだ。このことより僕が永続的学生であることは、学生であることに立脚点をすえる中から大学共同幻想体へ永続的闘争を組み、本質的学生を体現していくことである。この進級拒否の闘いは、関学でもほんの一握の学生が苦痛をもって語るように、〈体制内学生〉であることが〈労働力商品〉としての学生の〈被害者〉アレルギーから解放される闘争として位置づけられるだけではなく、真に、自らの保証された位置を苦痛をもって確認する中で、ただ単に意識内だけで自分を否定して、将来的には職業革命家になってそのつぐないをするつもりだから、今は労働者におんぶしてもらう闘争であることを暗黙的に自己合理化していくからこそ、原則的には一応労働者との連帯を常に語りながら、現象的には意識的に目覚めた者の先駆的なプチブル急進主義の闘いと転落せざるをえない。

そのような学生戦線の闘争が労働者の中の解る者しか解りえぬ擬似家族幻想的連帯の闘いしかなりえぬのであって、職場共同幻想のなかでなんとかプチブル生活をあこがれている広範な労働者への本質的な語りかけにならない。真に過去のわれわれのそのような限界を持った学生戦線の闘いを鋭く総括する中から、進級拒否者同盟の結成の提起があるのだし、この進級拒否闘争の推進の中にこそ、過去の学生戦線の日本階級闘争を不断に疎外した限界を突破するものがあるのだ。そのことをす通りする形で観念的に自己否定の闘いとか、労働者と連帯した闘い等の空語をふりまくな。

自己の内なる特権的学生の変革否定、これは単に意識そのものがそうであり、それでもって将来的に労働者になっていけばそれですむのではなく、自己の闘争以前の意識ではなく、存在そのものの変革なしには状況への、あるいはこの闘争を真に担っていく変革主体とは決してなりえぬことを知れ！

進級拒否者は、他のいかなる部分(進級して闘っていくという者たち)が意識においてこの矛盾の本質を意識し、口先では如何なることをほざこうとも、彼らの存在の地点では自らの日常性を否定できないことにより結局は立脚点を〈被害者〉としての学生として位置づけざるをえなく、運動次元では旧左翼然とした物とり革命路線に転落せざるをえないような運動を突破するものとしてある。

現闘争において過去の学生運動を総括し〈加害者〉としての自己意識と、それを実体化することこそ語られるのだし、今回の闘争はそのような自己の否定、変革、幻想の払拭、立脚点の自立を存在に実体化し、〈被害者〉〈加害者〉を止揚していく全体革命、非妥協的〈拒否〉の永続革命としての方向を見出す闘争なのだ。

【1969.2.26-27 全学追求集会】









5ヶ月間に及ぶ関学闘争の烽火は、権力側の集中砲火を浴びせかけられながらも今なお炎々と燃え続けている。当局が、改革案でいくら制度的手直しを試みたとしても、それはわれわれに対する解答にはならないであろう。われわれは「法と秩序」の厚い壁に屈することはできない。ただ、闘争の永続化あるのみである。

【アピール】

主体の参加を媒体とし、主体の喪失は必至となり、その崩壊過程の中で、まさに、“自己否定”を自問してみる。

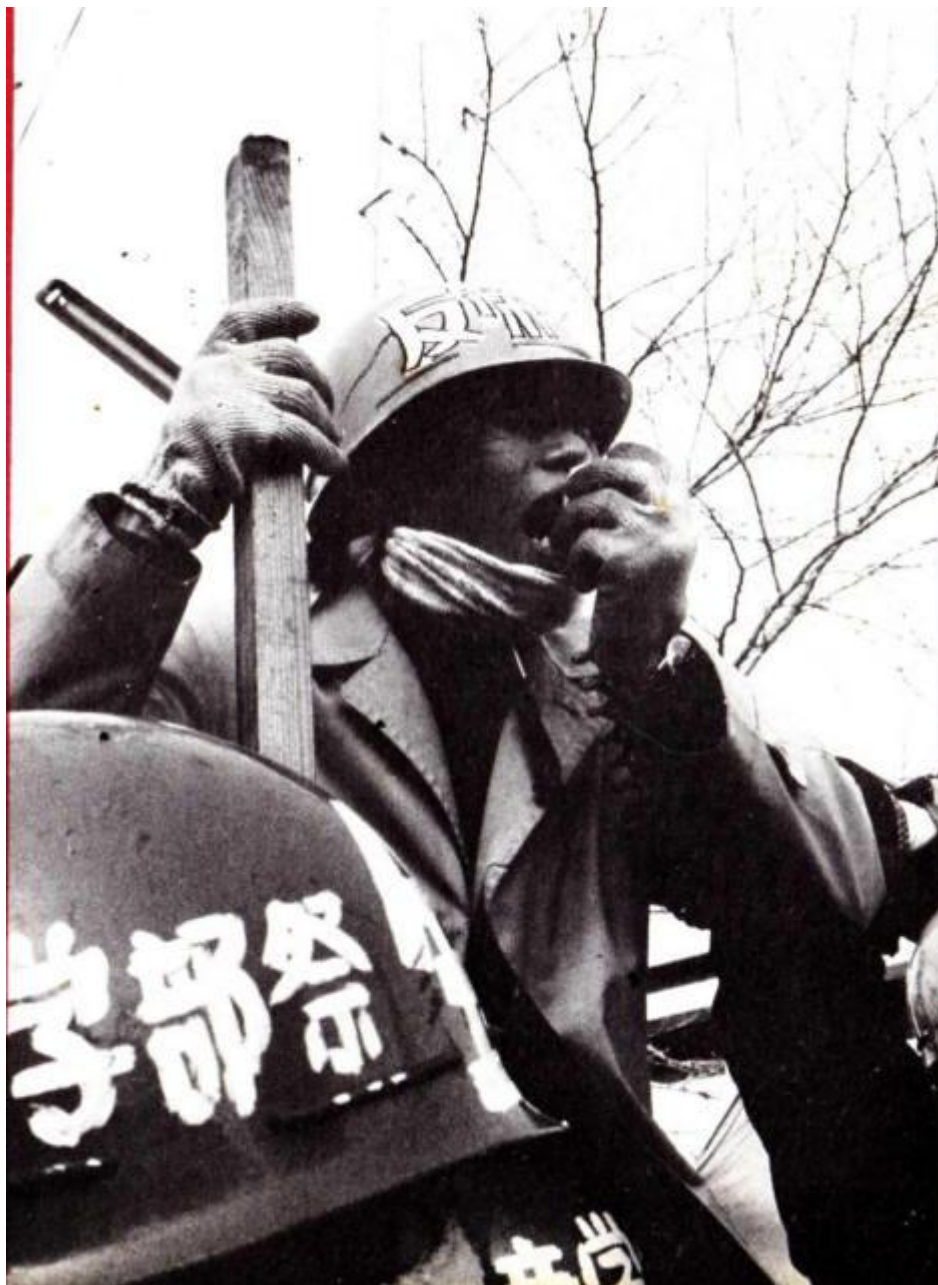
“NON”“NON”“NON”と繰返されたこの闘争は、日常性から非日常性に、そして、それが日常性へと回帰する不連続線である。“NON”は今後も生き続けるであろうし、創造へ続く、“拒否”の闘いとならねばならない。

闘争のなかで、自己が歴史の客体から主体に転化したとき、類々と、“関学 80 年”の死者の列が現れた。私は、バリケードのなかで人間のはらわたの臭いを知り、バリケードの外の、風化した現実を確認したのである。

第5別館、法学部で闘った学友の姿は、“生”の極限状態であり、全学集会のあの蛇のように長

い人の帯は、まさに、幻想でしかないのではないか！

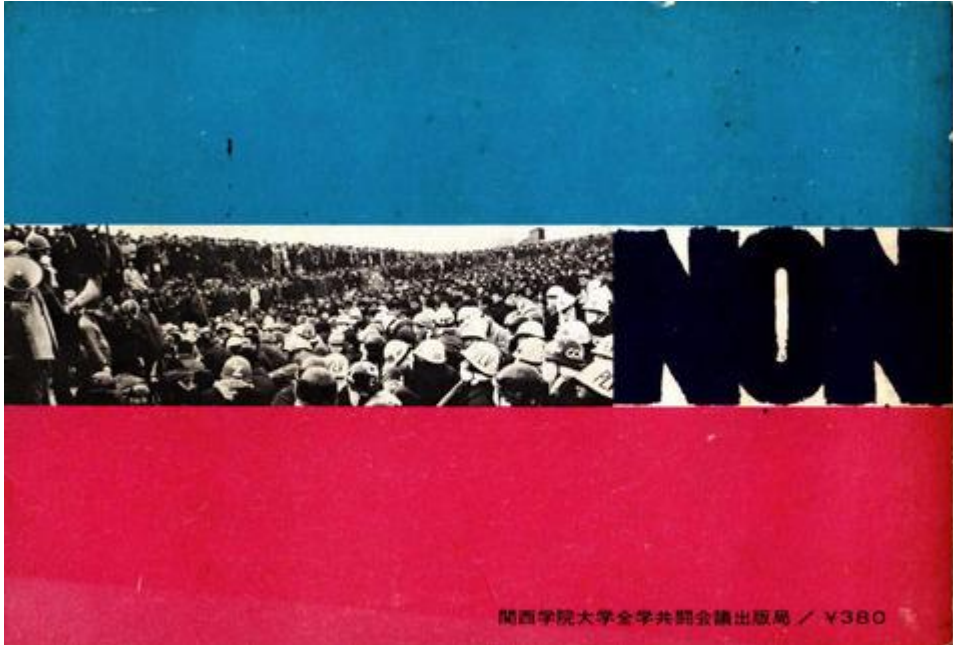
われわれは、いま、あの国家権力との対峙関係のなかで、かいま見た、“生”の意味を再度とらえ返してみるべきではないのか！



一人の人間の行為が
見る者に対して
重くのしかかってくる

彼の行為の中に
何を見出し 如何に止揚するのか
それは 決して
きまぐれの有効性のみで語られるべきものではない

写真が全ての抑圧のなかで
権力と向きあうとき
それは
武器となりえる



この「関学闘争の記録」は69年4・28闘争で終わっている。その後の関学闘争の様子が新聞に掲載されているので見てみよう。

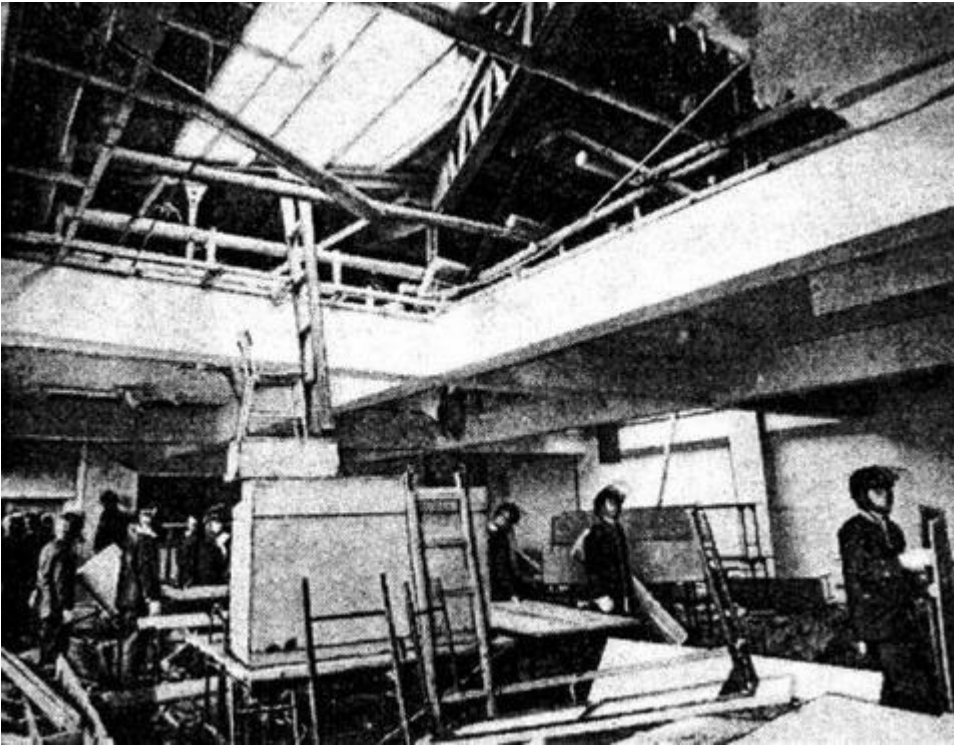


【全共闘も海までは一 関学大で洋上講義】毎日新聞 1969.4.30(引用)

30日朝、神戸港中央堤から関西学院大学(西宮市)商学部新1年生500余人と50人の教職員を乗せた関西汽船の客船わかば丸=1,044トン=が午後5時帰港の予定で小豆島一周に出港した。教室の使えない封鎖大学「いくら全共闘でも海上まではこられまい」と、一人千円の実費負担の“洋上講義”に踏み切ったものだが、場違いに“初登校”に新入生たちはさえない表情だった。タラップでは教職員が身分証明書の提供を求めて船内での“反乱”に目を光らせていた。

一方、兵庫県警は「ヘルメット学生4,50人が関学大を出た」という情報で、約50人の機動隊を待機させたが、午前8時半ごろ隊列を組んで押しかけたヘルメット学生は18人。機動隊に阻止され、わかば丸のそばまで行けず、機動隊と対立したまま「新入生は乗船を拒否だよ」とシュプレヒコール。

船上では西治辰雄学部長が「決して全共闘を避けたわけではない」といいながらも、こわばった表情でデッキに立ちすくみ、わかば丸は神戸海上保安部の“なだかぜ”水上署の“きくすい”両巡視艇に守られて午前8時50分、ものものしく出港していった。



【関学大で封鎖を解除 機動隊出動 百余日ぶり】毎日新聞 1969.6.13(引用)

兵庫県警は関西学院大学＝西宮市上ヶ原、小寺武四郎学長代行＝の要請で、13日午前7時、1900人の機動隊を学内に入れ、118日ぶりに実力で封鎖を解除した。同大学が警官を導入したのは、2月9、10日の入試について2回目だが、全学生と大学職員に「14日に登校するよう」呼びかけ、バリケードに使われたイスや机などを片づけ、来週中には新学期の履修届を終わり、6月30日から正規の授業を始めることにしている。

学内に100人余りたてこもっているとみられていた全共闘学生は機動隊の入る直前の午前5時、学内の通称“時計台放送”で予告して退去したため、機動隊が学内に入った時はもぬけのカラで第一学生会館にいた1人を調べただけ。

このため封鎖解除は抵抗なく進められ、午前7時2分豊倉三子雄教授のマイクによる退去勧告に続いて行われた経済学部校舎を手はじめに法、商、神、社会学部、図書館、第五別館、教授研究室など25の建物の封鎖解除が午前9時ごろ終わり、キャンパス南西側の上ヶ原上水道で火炎ビン43本、西側のゴミ焼却場などで鉄パイプ75本、角材69本、石多数を押収した。

大学側が強制封鎖解除に踏み切ったのは、今月9日に提案した同大学改革案が約1万人の学生の支持を得たので、機動隊導入に一般学生に強い反発はないと判断した。

【キャンパス情報 やっと授業を再開】毎日新聞 1969.7.1(引用)

〈関学大〉闘争に終止符をうって新学期が30日に始まった。全共闘学生によって封鎖されていた学舎が4ヶ月ぶりに機動隊の手で解除され、16日から一部の学部では新生や4回生の授業を再開したが、2、3回生を含めた全学(学生数12,500人)の授業再開は初めて。(終)